

日本英文学会中部支部
第69回大会プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日時：2017年10月28日(土)

会場：福井大学文京キャンパス

(〒910-8507 福井市文京3丁目9番1号)

日本英文学会中部支部事務局

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836
静岡大学教育学部 英語科共同研究室内

E-mail: chubu@elsj.org

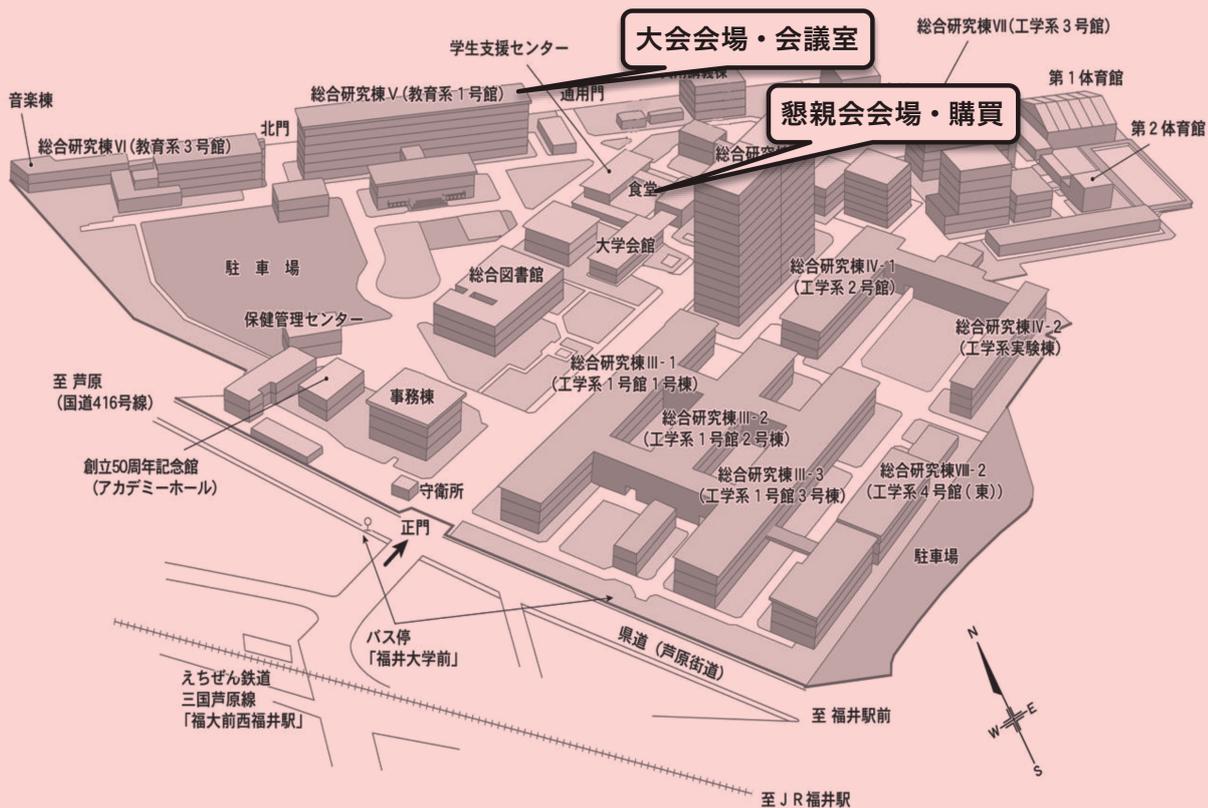
HP: <http://www.elsj.org/chubu/>

文京キャンパスへのアクセス方法

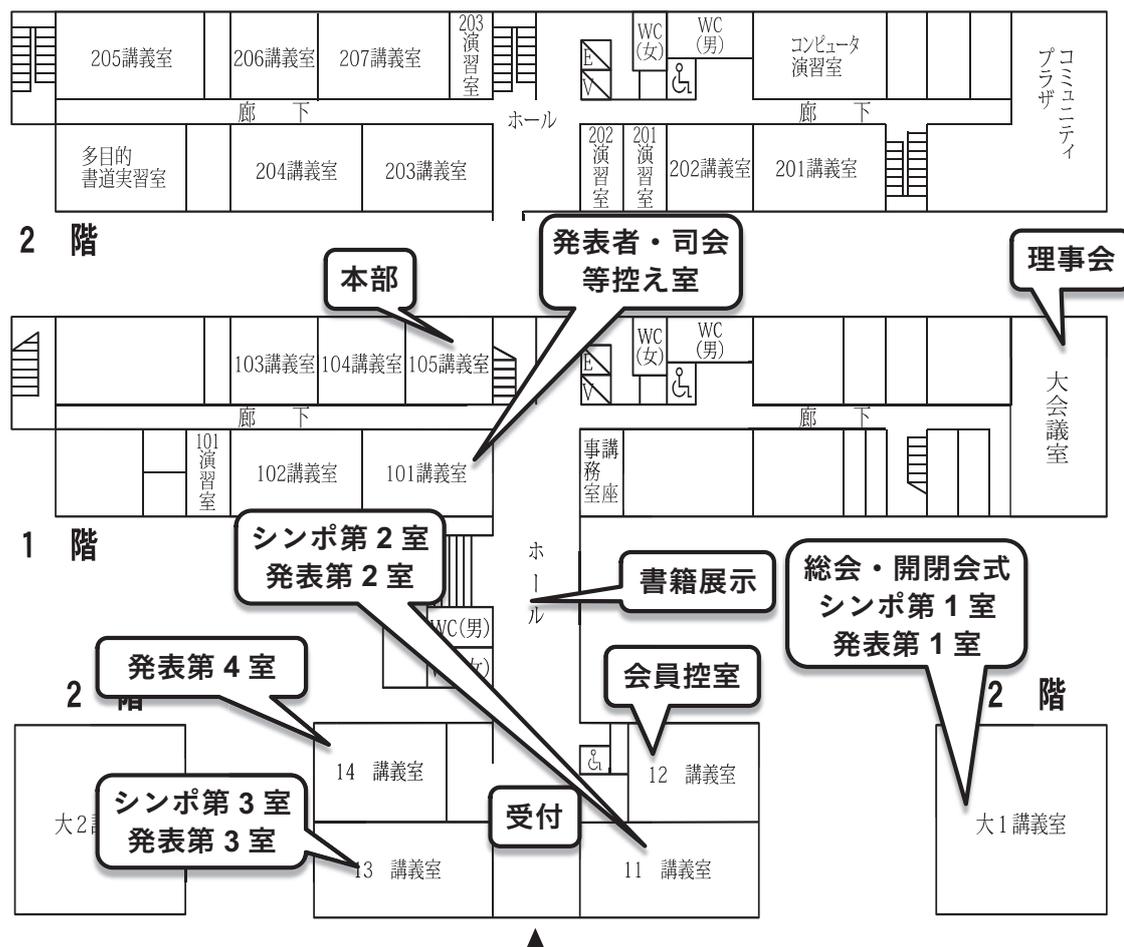
- ・鉄道／えちぜん鉄道福井駅-(約10分)-福大前西福井駅 [JR福井駅東口から出て三国芦原線に乗車]
※西口前の福井鉄道(路面電車)ではありません。
- ・バス／京福バス福井駅-(約10分)-福井大学前停留所 [JR福井駅西口バスターミナル2番のりばより乗車]
- ・タクシー／JR福井駅-(約10分)-福井大学文京キャンパス [必ず「福井大学文京キャンパス」と伝えてください]



文京キャンパス マップ



教室案内 (総合研究棟 V)



受付: 1階入口 開会式・総会・閉会式: 2階大1講義室 シンポジウム: 2階大1講義室・1階11講義室・13講義室
 研究発表: 2階大1講義室・1階11講義室・13講義室・14講義室 発表者・司会者等控え室: 1階101講義室
 会員控室: 1階12講義室 書籍展示場: 1階ホール 理事会: 大会議室 大会本部: 1階105講義室

開催校からのお知らせ

【ご入構について】

自動車でのご来校はご遠慮いただき、公共交通機関をご利用ください。

【食事場所について】

大学内の食堂は閉まっております。各自昼食をご準備ください。

【周辺のコンビニ情報など】

学内では、生協の購買部「ショップ満天」が11時から14時まで営業を予定しております。また、大学の近くにもコンビニエンス・ストアがございます。

【開催校からのお願い】

当日教員免許認定講習が大会会場と同じフロアの教室で予定されております。ご高配の程、お願い申し上げます。

日本英文学会中部支部第69回大会プログラム

日時：2017年10月28日(土)

場所：福井大学文京キャンパス(福井市文京3丁目9番1号)

大会受付 12:20より (総合研究棟V 1階入口)

開会式 12:45～12:55 (総合研究棟V 2階 大1講義室)

開会の辞 日本英文学会中部支部長 内田 恵

開催校挨拶 福井大学国際地域学部長 寺岡 英男

総会 12:55～13:20 (総合研究棟V 2階 大1講義室)

シンポジウム 13:30～15:40

第1室(イギリス文学) 総合研究棟V 2階 大1講義室

『食卓のイギリス——エリザベス朝からロマン主義時代まで』

司会・講師 川津 雅江 (名古屋経済大学名誉教授)

講師 内藤 亮一 (富山大学教授)

滝川 睦 (名古屋大学教授)

中井 理香 (立正大学准教授)

第2室(比較文学) 総合研究棟V 1階11講義室

『人新世への文学的応答』

司会・講師 結城 正美 (金沢大学教授)

講師 小原 文衛 (金沢大学准教授)

山本 卓 (金沢大学教授)

喜納 育江 (琉球大学教授)

第3室(英語学) 総合研究棟V 1階13講義室

『英語経路表現の諸相』

司会・講師 都築 雅子 (中京大学教授)

講師 鈴木 猛 (東京学芸大学教授)

堀田 優子 (金沢大学准教授)

研究発表 第1発表 15:50～16:15 第2発表 16:20～16:45

第3発表 16:50～17:15

第1室 総合研究棟V 2階 大1講義室(英文学) 15:50～16:45

第2室 総合研究棟V 1階11講義室(米文学・比較文学) 15:50～17:15

第3室 総合研究棟V 1階13講義室(英語学) 15:50～17:15

第4室 総合研究棟V 1階14講義室(英語学) 15:50～17:15

閉会式 17:20～17:30 (総合研究棟V 2階 大1講義室)

閉会の辞 日本英文学会中部副支部長 吉田 江依子

懇親会 18:00～19:30 カフェテリア 味菜 (会費4000円)

研究発表一覧

第1室(英文学)

総合研究棟V 大1講義室

司会 服部 厚子(鈴鹿医療科学大学教授)

1. *The Three Lords and Three Ladies of London* (『ロンドンの三貴族と三淑女』)における「Pompe (栄華)」と「Lucre(金銭)」の結婚

奥山 厚子(名古屋大学大学院)

司会 内藤 亮一(富山大学教授)

2. Self-Imposing Exclusion of Sir Guyon in Book 2 of *The Faerie Queene*

Lu CHEN(名古屋大学大学院)

第2室(米文学・比較文学)

総合研究棟V11講義室

司会 宮地 信弘(三重大学教授)

1. *The Lord of the Rings* and Fairy Tales

秦野 康子(名古屋大学大学院)

司会 深谷 公宣(富山大学准教授)

2. 登場人物の移住——サブリナの場合

楚輪 松人(金城学院大学教授)

司会 武田 貴子(名古屋短期大学教授)

3. コピペされ拡散されるエマソン——自己啓発ライターとしてのラルフ・ウォルドー・エマソン

尾崎 俊介(愛知教育大学教授)

第3室(英語学)

総合研究棟V 13講義室

司会 二村 慎一(愛知淑徳大学准教授)

1. 虚実皮膜の認知モード——*Alice's Adventures in Wonderland*における表現を例に

向井 理恵(高岡法科大学助教)

2. 引用句倒置構文の派生に対する一考察

小林 亮哉(名古屋大学大学院)

3. ACC-ingの構造について

鈴木 達也(南山大学教授)

第4室(英語学)

総合研究棟V 14講義室

司会 柳 朋宏(中部大学准教授)

1. 英語の関係節における二重詰めCompフィルターの通時的発達について

内田 脩平(名古屋大学大学院)

2. 古英語・中英語の独立分詞構文の通時的発達について

中川 聡(藤田保健衛生大学講師)

3. 英語のフェイク目的語結果構文の派生とその意味解釈について

新妻 明子(常葉大学短期大学部講師)

シンポジウム・要旨

第1室(イギリス文学) 総合研究棟V 大1講義室

食卓のイギリス——エリザベス朝からロマン主義時代まで

司会・講師	名古屋経済大学名誉教授	川津雅江
講師	富山大学教授	内藤亮一
講師	名古屋大学教授	滝川睦
講師	立正大学准教授	中井理香

イギリス料理はまずいことで有名だが、おいしいという人もいる。食物の好みは個人的なものである。それはまた、言語のように、国や地域毎に違ふとともに、家庭、階級、宗教毎にも違いがある。イギリスの伝統的料理と言えばローストビーフだが、それを食することは、ヒンドゥー教徒のインド人には汚聖行為になる。すべての文化や社会は食べ物と密接な関係があるのである。

小野塚知二は、イギリスの食文化の衰退(つまり、小野塚によれば、料理がまずくなった)時期を19世紀前半であると論じている(「イギリス料理はなぜまずいか?」井野瀬久美恵編『イギリス文化史』)。本シンポジウムでは、エリザベス朝からロマン主義時代までのイギリスにおける食物の表象にさまざまな視点から接近し、イギリスの食物の歴史的・文化的推移、社会的・医学的・倫理的意義および政治的イデオロギーを浮き彫りにして、イギリス料理を存分に味わってみたい。文学研究において食に注目することは、21世紀初頭に哲学、科学、フェミニズム批評、環境批評などさまざまな分野で顕著になってきた「マテリアルへの転向」の流れにそっている。「マテリアルへの転向」は、リアルなもの／マテリアルなものは言語の構築物にすぎないとするポストモダニズムやポスト構造主義の言説偏重に対する反動である。後者の批評では、「食」ではなく「食についての言説」の分析で終わるが、知の饗宴とでも言うべき本シンポジウムでは、遠い昔のイギリスのリアルな食卓を皆で囲むことになるであろう。

16-17世紀の肉食と菜食

内藤 亮一

『お気に召すまま』(1599-1600)のなかで、公爵たちが森で鹿を殺していることをジェークイズが非難していると伝えられるが、果たしてジェークイズは菜食主義なのか、それとも言葉と裏腹に肉を食べるのだろうか。16世紀後半から17世紀中頃にかけては食事・料理に関する文献が盛んに出版されたが、Joan Fitzpatrickは当時の観客はジェークイズの憂鬱が肉を食べているからであり、偽善を見抜いていただろうと述べる。公爵自身も鹿狩りにためらいを感じているが、この劇で肉食は必要悪とみなされている。それと対照的に『冬物語』(1609-10)では狩りは肯定されず、パーティタの「毛刈り祭り」は菜食料理がメインディッシュである。Fitzpatrickはこれらの劇が菜食を不健康とみなす当時の見解を問題視していると述べる。発表では、当時の肉食と菜食の問題について、ガレノスの見解のほかにも食に関わる様々な要素を考えてみると同時に、狩りと男性性の問題にも言及してみたい。

ダイエットの詩学——近代初期英国における——

滝川 睦

「ぼくはビーフが大好きだから、それがきつと頭の働きの障がいとなっているんだ……ならばビーフとはきっぱり手を切ろう」と宣言するのは、シェイクスピアの『十二夜』(1601?)に登場するサー・エイギュチーク。「ダイエット」(diet)を意識した「食事」(diet)に言及した台詞と言えよう。本劇のカーニヴァル世界の幕開けにおいてすでに垣間見られた、四句節の訪れと言っても良い。OEDによれば“diet”が「ダイエット」の意味で最初に使われたのはチョーサーの「尼僧院長の話」(1386)。シェイクスピア喜劇からは二例が引用されている(“diet,” def. 3)。本発表はカーニヴァル世界から荒野に放逐される王が登場する『リア王』(1604-05?)や、「干草」のように乾涸びる船長=王を描いた『マクベス』(1606)などの、17世紀初頭の英国演劇における「ダイエットの詩学」について考察する。

18世紀消費文化の視点からみたパイナップル

中井理香

アンドルー・マーヴェルの詩「バミューダ島」(1653)の中で語られるパイナップルは、この詩人の体験に基づいた理解ではなくとも、バミューダ島のこの果実に象徴的な意味を持たせて詩的効果をあげている。やがて1660年に王政復古が実現すると、その翌年、庭師によってチャールズ2世にバルバドス島のパイナップルが献上され、その場面がおよそ1670年に絵画として描かれた。以後イングランドの交易と消費の発展にともない、有名になったパイナップルは王侯貴族から次第に中産階級へと流通するようになる。それは同時にジョセフ・バンクスらの博物学、つまり海外の目新しい植物等を収集して分類し、自然を理解する営みにも連動する。このような17世紀後半から18世紀に展開した博物学的な知は、18世紀の作家たちにどのような刺激を与え、さらに消費文化の拡大とともに、パイナップルは物としてあるいは装飾としていかに人々に浸透していったか、その経緯を論証する。

ローストビーフを食べる——ロマン主義時代の食の政治と倫理

川津雅江

ロバート・キャンベルは『ロンドン商人』(1747)において、ローストビーフはエリザベス女王の時代には「イングランドの食べ物」であったが、今や人々の好みはそういうあっさりした簡素な料理から異国の香辛料をふんだんに用いたフランス料理へと変わってきていると嘆いた。実際には、フランス料理を好んだのは上流階級に属する人々だけであったが、キャンベルの嘆きはイギリス人のフランス嫌い、「古き良きイギリスのローストビーフ」の歌で示されるような愛国主義を反映している。本発表では、フランス革命期のロマン主義時代において、こうしたフランス嫌いと愛国主義を巡る食がいかに複雑に政治化されるとともに当時の社会的・経済的・倫理的問題と結びついてきたかを、主としてジョン・オズワルドのようにローストビーフを食べることに反対する立場の者の声を通して考察する。その過程で、ロマン主義時代の階級別の食卓の実態を垣間見てみたい。

人新世への文学的応答

司会・講師	金沢大学教授	結城正美
講師	金沢大学准教授	小原文衛
講師	金沢大学教授	山本卓
講師	琉球大学教授	喜納育江

現在は、地質時代区分上は依然として、最終氷期の終わる約一万年前に始まる「完新世」にある。しかし、とりわけ産業革命以降、人間の諸活動が地球に著しい影響を及ぼしていることから、根本的に新しい地質時代として「人新世」(the Anthropocene) という概念が提唱された。文字通り、人類 (Anthropo) の新たな時代 (cene) の謂いで、気候変動に象徴されるように人間の活動の影響が地球を隈なく覆っている現状の認識にもとづく概念であり、まだ地質時代として公式に採用されてはいないものの、現代の諸問題を論ずる際に必ずと言ってよいほど使われる言葉である。人新世をめぐる議論は、自然科学と人文科学とを問わず活発に展開しているが、人文学の見地からは「人類」や「人間」という総称が逆に人間という概念を浅くしてしまうことへの懸念が表明されている。「人間」の活動、「人間」の影響というふうに「人間」を単位とすることで、人種やジェンダーや階級をはじめとする人間社会の諸問題が見えにくくなる。もちろん人類全体として向き合うべき問題はあるが、人間同士の込み入った関係を織り込んだ濃度の高さが「人間」という概念に求められるのではないのか。言い換えれば、人類の新たな時代だからこそ、「人間」について改めて考えることが必要ではないのか。このように人新世における「人間」の再考が人文学において展開している状況を踏まえ、本シンポジウムでは文学や映像表象における人間の再イメージの試みを分析する。

人新世の庭——domesticationとwildnessをめぐる

結城正美

人新世において野生は消滅した、という見解を少なからず目にする。こうした野生不在説は、人間の諸活動に由来する有害物質や影響が地球全体に行き渡っているという認識にもとづくものだが、必ずしも悲観的に論じられているわけではない。人間が変えた地球環境の改善に資することができるのは人間しかいないという楽観的見地に立ち、科学技術等を駆使して地球を持続可能な方向に〈飼い馴らす〉ことを支持する動きもある。このように人新世の議論にみられる domestication と wildness のベクトルは、19世紀から連綿と続く conservation (保全) と preservation (保護) の抗争の系譜に位置付けられる一方で、物理的な野生の不在という新たな現実において固有の動きを示している。本発表では、Emma Marris, *Rambunctious Garden* (2011) 等における〈庭 (garden)〉の表象分析を通して、〈人類の時代〉における domestication と wildness の言説を考察する。

Aping the “Beyond” of the Anthropocene

——キング・コング映画は人間の〈彼方〉を表象できるか

小原文衛

本発表では、1933年の *King Kong*、1976年のリメイク、2005年のリメイク、そして、キング・コング映画としては最新作となる *Kong: Skull Island* (2017) におけるコング表象の特徴を分析し、

この怪獣表象がどのように〈人間〉の領域を侵犯するのか、あるいは、この怪獣表象をどのように〈人間〉の領域が侵犯するのかを考察して、「人新世」の〈彼方〉の表象可能性の問題に接続する理論の構築を目的とする。コングが住まっていた〈髑髏島 Skull Island〉は、まさに「人類立入禁止」(日本版予告編より)、〈未知〉の場所であり、王者たるコングは、人類の〈彼方〉を指し示すと想定されるが、ことはそう簡単ではない。〈彼方〉を指し示すものが〈サル〉=〈エイプ〉であることも、もちろん看過できない。*Planet of the Apes* (1968)に始まる、ポスト・ヒューマン論としてのエイプ・ナラティブもラカン的な視点で読み直し、〈人間〉=〈症候〉の理論を抽出して、コング・ナラティブの再解釈に役立てたい。

オセアニア文学の Anthropocene —— ポストコロニアリズムと環境学の接点を探る

山本卓

人新世 (Anthropocene) とは、これまで科学として扱われてきた「環境」を人文学的な立場から再規定する試み、すなわち Tobias Boes の言葉を借りれば、「地球体系の変化についての科学的な研究に付随しうる解釈学であり詩学 (poetics)」となる。詩学という言葉で思い出されるのは、Stephen Greenblatt が *Renaissance Self-Fashioning* で用いた「文化の詩学 (cultural poetics)」だろう。新歴史主義が歴史の解釈において従来とは異なる視座を求めたとすれば、人新世は環境に対する新たな見地の必要性を訴えるのである。しかしながら、両者は独立した事象ではない。新歴史主義的な研究手法によって探求されてきたポストコロニアリズム研究は、人新世における人と環境の関わり方を論じてきたと言えないだろうか。西洋人が未開の土地に踏み込み、文明化することはとりもなおさず環境への積極的な働きかけであり、生態系の破壊や気候変動といった様々な問題を引き起こしてきた。また、そうした西洋のやり方は現地の人々の自然との関わり方をも変化させてきたのである。本発表では、西洋の最後の到達地の一つであるオセアニアに焦点を当て、20世紀末から今世紀にかけての彼の地の作家たちが、植民地主義によって篡奪された彼らの環境を作品の中でどのように認識し再構築しようと試みたのかを論じようと思う。

人新世と「他者」—— 抵抗の視座としてのジェンダーと文学

喜納育江

「人新世」については、人間や文明がその限界や無常性を認め「死ぬことを学ぶ (learning to die)」機会であるとする逆説的な持論を展開する者もいれば、人間がそれまでの生き方を振り返り、この世の終わりに抵抗する「再発見された新たな視点 (a vantage point rediscovered)」とみなす者もあり、様々な立場から議論されている。本発表では「人新世」が改めて提起する「人間とは何か」という問いを、ジェンダーの視点から考察する。「人新世」の特徴として、近代資本主義的な「発展」の論理に支えられた「競争」あるいは「支配」という構造が存在する。すなわち「人新世」は、「他者」を「人間」の存続や発展を阻む脅威とみなす価値観や、それを無き(亡き)者にせずにはいられない「人間」の「他者」への恐れ、その恐怖を克服する手段としての暴力に支配された世界とみなすことも可能であり、ジェンダーの問題もそのような人新世の論理とは無関係ではない。こうした「人新世」という世界を、女性の書き手がどのような文学で表現してきたかについて考察したい。

英語経路表現の諸相

司会・講師 中京大学教授 都 築 雅 子
 講師 東京学芸大学教授 鈴 木 猛
 講師 金沢大学准教授 堀 田 優 子

英語の経路表現(移動表現および結果表現)の研究は、Jackendoff (1990), Levin & M. Rappaport Hovav (1995), Goldberg (1995), 影山 (1996), Washio (1997), 松本 (1997) 以来、語彙意味論、生成文法、認知言語学など、様々な分野で盛んに行われてきた。本シンポジウムでは、英語の経路表現を取り上げ、主に(1)英語の移動あるいは結果表現はどのように(下位)分類され、どのように認可されるのか、(2)移動表現と結果表現の関係はどうなっているのか、(3)通言語的あるいは言語習得の観点から、英語の経路表現はどのように位置づけられるのか、などについて考察する。それらの考察を通し、英語の経路表現全体に関する理解を深めたい。

英語の経路前置詞句とその周辺

鈴 木 猛

(1)のような主体・客体の移動に関わる英語表現の代表的な分析には次の2つがある。

- (1) a. John ran up the hill.
 b. John put the glass on the box.

第1に、唯一の述語(動詞)が経路前置詞句を含む補部を選択するという伝統的な分析。第2は、Hale and Keyser (1993)以降lexical semanticsの知見を統語構造で表そうとするアプローチなどに見られる分析で、前置詞句も(二次)述語で、(1a)では主語が、(1b)では目的語が、それぞれ二次述語の意味上の主語になっている。本発表では、英語においては第2の分析が妥当である一方、日本語において前置詞は述語ではないことを提案し、習得データからの証拠、結果構文との相関、satellite-/verb-framed languagesを分けるtypology (Talmy 1985)に対する理論的関連などを論じるとともに、それらを言語習得過程の特性から説明する可能性を示唆する。

英語の結果構文と移動使役構文のプロトタイプと拡張をめぐって

堀 田 優 子

本発表では、英語の結果構文(resultative construction)と移動使役構文(caused-motion construction)とが融合したようにみられる、以下のような例を取り上げる。

- (1) a. The cook broke the eggs into the bowl.
 b. *He broke the mirror into the garbage pail. (Levin & Rappaport Hovav 1995)

(1a)では、動詞breakが示す状態変化(卵の殻が割られること)と前置詞句が示す位置変化(卵の中身がボウルに入ること)の両方が含まれるが、(1b)では、動詞breakは位置変化を表す前置詞句とは共起しない。こうした例は、Goldberg (1991, 1995)の主張する「単一経路制約(Unique Path Constraint)」に一見違反している。本発表では、認知文法の枠組みに基づく、英語の結果構文の分析(Horita 1995, 1997など)をもとに、こうした二つの構文にまたがる形式について、事態認知の観点から、どのように捉えられるか、探ってみたい。また、Goldberg (1995)の分析では、結

果構文は移動使役構文からのメタファー的拡張と考えられているが、その拡張関係についても、上記のタイプの例の分析をもとに再考を試みる。

英語結果構文のプロトタイプと擬似結果述語

都 築 雅 子

英語の結果述語は、主に、本来的結果述語(弱い結果述語)と派生的結果述語(強い結果述語)の二種類に(あるいは擬似結果述語を加えると三種類に)下位分類される(影山1996, 2009; Washio 1997; 小野2009など)。ゲルマン言語にのみ限られ、複合述語形成などにより認可される「いわゆる結果構文」は、概略、派生的結果構文と呼ばれているものに相当する(鈴木2007; 都築2007など)。本発表では、「いわゆる結果構文」のプロトタイプを、フランス語、ドイツ語など他の言語と比較しながら、通言語的観点から(一部、通時的観点からも)探る。その際に、本来的結果述語・擬似結果述語と言われてきたものについても考察を加え、それらと「いわゆる結果構文」との関係についても探っていきたい。

研究発表・要旨

第1室(英文学) 総合研究棟V 大1講義室 司会 鈴鹿医療科学大学教授 服部厚子

第1発表

The Three Lords and Three Ladies of London

(『ロンドンの三貴族と三淑女』)における「Pompe(栄華)」と「Lucre(金銭)」の結婚

名古屋大学大学院 奥山厚子

16世紀中ごろ以降、それまでの宗教的・教訓的なものに代わって、当時の経済的・社会的問題点を演じる劇が登場するようになった。Robert Wilsonの*The Three Lords and Three Ladies of London* (1590)はそのような劇の一つである。三淑女の中の「金銭」との結婚をロンドンの三貴族が望むが、「金銭」の周囲には悪徳を表象する人物がはびこり虎視眈々と「金銭」に近づこうとしている。イングランドが不況に喘ぎ、スペイン侵略の恐れや宗教的混乱の中、三貴族の一人「栄華」と「金銭」との結婚が意味することについて述べる。三貴族は以前の道徳劇であればタブーとされる、富・権力の集中を表象し、当時のロンドンの姿でもあった。イングランドを支えていたのはロンドンの経済であり、その利権は外国の侵入を許してはならず、経済力(「金銭」)と結びついた強大な力(「栄華」)こそが外交的・経済的大国、イングランドにとっては必要であったということを「金銭」と「栄華」の結婚は示している。

司会 富山大学教授 内藤亮一

第2発表

Self-Imposing Exclusion of Sir Guyon in Book 2 of *The Faerie Queene*

名古屋大学大学院 Lu CHEN

In *The Faerie Queene* (1590, 1596), the errant knights are frequently faced with wondrous visions. Among these wonders, there are epiphanies that can be trusted, and those illusions that are evil and perilous. Sir Guyon, the protagonist of Book 2, is distinctive from other knights in that his virtue demands him to resist all absorbing visions. In *Gazing on Secret Sights*, Theresa M. Krier suggests that for Spenser, “being seen is the fundamental intrusion on selfhood” (148). In Guyon’s case, however, it is the invasion of images that brings the real danger of losing identity. In some aspects, Guyon’s reaction towards visual temptation is close to an ascetical practice in the middle ages. At the same time, the enlightening wonders in Book 2, that is, the epiphanies of Belpheobe and of the guardian angel, are inaccessible to Guyon as well. The focus of this paper will be upon the features of Guyon’s resisting power towards tempting visions and the limitation of his “Temperance.”

第1発表

The Lord of the Rings and Fairy Tales

名古屋大学大学院 秦野康子

J. R. R. Tolkien's essay "On Fairy-Stories" (1947), first took shape as a lecture delivered in March 1939. Verlyn Flieger and Douglas Anderson, the editors of *Tolkien On Fairy-Stories* (2014), contend that the lecture on fairy stories came at a critical juncture in Tolkien's creative development marking the transition between his two best-known works, *The Hobbit* (1937) and *The Lord of the Rings* (1954-55) and that the sequel became the practical use of the principles set forth at St. Andrews (15); the essay on the principles on fairy stories forms the "theoretical basis for his [Tolkien's] fiction" (9). In the essay on fairy stories Tolkien attempts to define the nature of fairy-stories, categorizing them "not [as] stories about fairies, but stories about Faërie, the realm or state in which fairies have their being" (*Tree and Leaf* 9).

In this presentation, the Tolkien's fairy-story essay is discussed by investigating how the principles of the fairy tale presented in the essay on fairy stories function in his work *The Lord of the Rings*.

司会 富山大学准教授 深谷公宣

第2発表

登場人物の移住——サブリーナの場合

金城学院大学教授 楚輪松人

"Characters migrate." Umberto Eco (1936-2016) の *On Literature* (2005) の巻頭論文 'On Some Functions of Literature' (2004) にある言葉である。文学史に登場するある人物は自分が生まれたテキストを離れ、他のテキストへ移住し、新たな生を獲得する。輪廻転生を繰り返す人物である。本発表の主題は Sabrina というキャラクターで、テキストの移住に伴う彼女の変態の様式を考察する。Sabrina が移住するテキストは、年代記、頌栄、仮面劇、舞台劇、映画と多様である。英国伝説の Ur-Sabrina から始まって、後代の作家たち、"Sabrina Texts" の生みの親は、歴史家 Geoffrey of Monmouth、詩人の Edmund Spenser と Milton、劇作家の Samuel Taylor、そして映画監督の Billy Wilder と Sydney Pollack である。本発表では Sabrina の変態の様式と方法を検証し、彼女が虚構の人物として生き続けること、その輪廻転生が Cinderella complex と関係することを明らかにする。

第3発表

コピペされ拡散されるエマソン——自己啓発ライターとしてのラルフ・ウォルドー・エマソン

愛知教育大学教授 尾崎 俊介

19世紀アメリカを代表する知性の一人、ラルフ・ウォルドー・エマソン。アメリカ文学史の文脈の中では「超越主義」の唱道者として、また「アメリカの知的独立宣言」とも評された“The American Scholar”の著者として確固たる地位を築いていることは今更言うまでもない。しかしその同じエマソンが、今日のアメリカ及び日本の一般人の間では無双の自己啓発ライターとして認識されていることに我々は気が付いているだろうか？ 実際、エマソンが書いたとされる無数の言説は、今日陸続と出版される無数の自己啓発本の中に盛んに引用されているばかりでなく、それがさらにコピペされ、インターネット上に拡散し続けているのだ。本発表ではこうした現状について報告しながら、エマソンを「自己啓発ライター」として再定義し、形こそ違え、21世紀の今日に至っても衰えることのないその影響力の大きさを確認したいと考えている。

第3室(英語学) 総合研究棟V 13講義室 司会 愛知淑徳大学准教授 二村 慎一

第1発表

虚実皮膜の認知モード——*Alice's Adventures in Wonderland*における表現を例に

高岡法科大学助教 向井 理恵

Lewis Carrollの*Alice's Adventures in Wonderland*では、様々な二者間で、読者は揺さぶりをかけられる。「あるのにない」という相手の真意を無視したアリスを、「ないのにある」と徹底的にやりこめるA Mad Tea-Partyや、‘Are their heads off?’と問うクイーンに、‘Their heads are gone.’と返すことで、その場を切り抜ける兵士たちなど、枚挙に暇がない。いわゆる言葉遊びやレトリックが私達の心を動かすとき、そこには共通した認知のあり方が存在していると考えられる。本発表では、同作品における例をもとに、2つの言葉(概念)が混ざり合い、新たに創発する意味を、Fauconnier and Turner (2002)のブレンディング理論の観点から記述し、認知モード(中村2004, 2009, 2016)の観点から、そこに共通する認知モードを浮かび上がらせる。

第2発表

引用句倒置構文の派生に対する一考察

名古屋大学大学院 小林 亮哉

引用句が文頭に位置する場合に主語と動詞の倒置が随意的に生じる。このような文は引用句倒置構文(QI)と呼ばれ、場所句倒置構文(LI)との表層構造の類似性により、主語は基底生成位置に残置し、TPの指定部へ移動しないという分析が提示されてきた。それとは対照的に、本発表では、主語は基底生成位置に残置せずにTPの指定部の位置へ移動すると主張する。また、引用句がwh句と並行的な振る舞いを見せることを示し、引用句はFocPの指定部へ移動すると仮定し、Nawata (2009)によって提案されたFocus Criterionに従うと主張する。具体的には、FocPを基準

位置とし、その主要部に基準を満たす素性[+F]を持つ要素を必要とする。英語の定形節のTが[+F]素性を持つという仮定のもと、本動詞がTを経由し、Foc主要部まで移動することにより基準が満たされる。通常、現代英語の本動詞はTへ移動することはないが、QIにおける本動詞は「意味的な軽さ」を持つため、例外的に移動できると主張する。

第3発表

ACC-ingの構造について

南山大学教授 鈴木 達也

本発表は、(1)のようなACC-ingの外部構造についてミニマリスト・プログラム(Chomsky 1995, 2013, 2015 他)に基づく分析を行うものである。

(1) I remember John singing a lot of beautiful songs at the party last week.

ACC-ingは節に近い特徴を示すことから(Horn 1975, Emonds 1976, 1985, Reuland 1983, Abney 1987, Pires 2006 他)、内部構造はTPあるいはそれに準ずる節構造を持っていると考えられている。一方、外部構造については諸説あり、DPを仮定する分析(Abney 1987 他)、TPまでの構造しか仮定しない分析(Suzuki 2001, Pires 2006 他)がある。

本発表ではDP分析、TP分析に加え、Bošković and Lasnik (2003)が提案するnull Cに関するPF Mergerの分析を踏まえたCP分析の可能性についても検討したい。Bošković and Lasnikは、null Cは[+V]範疇をホストとするPF Mergerによって認可されると主張するが、ACC-ingがnull Cを持つとすれば、格位置にしか現れ得ないことから格認可に関わる要素とのPF Mergerが想定される。さらにChomsky (2013, 2015)が提案するラベル付与のシステムとACC-ingの分析の整合性についても検討を加え、ACC-ingの外部構造に関する妥当な分析を探ることとする。

第4室(英語学) 総合研究棟V 14講義室

司会 中部大学准教授 柳 朋 宏

第1発表

英語の関係節における二重詰めCompフィルターの通時的発達について

名古屋大学大学院 内田 脩平

現代英語では間接疑問文や関係節においてwh句と補文標識は共起できないことが知られている。Chomsky and Lasnik (1977)は二重詰めCompフィルター(Doubly Filled Comp Filter: DFCE)を規定することでこの事実を説明している。しかし西フラマン語やドイツバイエルン方言、また歴史的に中英語期までは英語も二重詰めComp(Doubly Filled Comp: DFC)は許されている。本発表は英語の関係節におけるDFCEの発達に焦点を置き、英語の関係節でDFCが許されなくなったのはGelderen (2004)で提案された主要部優先原理が働いているからだとして主張する。具体的にはCP指定部を占めていたwh句が主要部に再分析されることで、C主要部であるthatと共起できなくなったと主張する。さらにこの分析はDFCEが認められるドイツバイエルン方言のDFCの容認度の差からも支持されることを示す。

第2発表

古英語・中英語の独立分詞構文の通時的発達について

藤田保健衛生大学講師 中川 聡

本発表では古英語から中英語にかけての語彙的主語を伴う分詞構文(独立分詞構文)の通時的発達を Pesetsky and Torrego (2004) で提案された Agree システムと Chomsky (2013) で提案された Labeling Algorithm (LA) の観点から説明する。古英語に独立分詞構文はラテン語の影響を受け発達したが、初期中英語には衰退し13世紀末以降に再び観察されるようになった。また、中英語に現在分詞の屈折形態素が消失し、主語に付与される格が与格から主格になったという統語的特性の変化も観察される。

この変化に対し、古英語では現在分詞は主語と一致し、両者に与格が付与されていたため、独立分詞構文はLAによってラベルが決定されるPP構造であったが、初期中英語に現在分詞の屈折形態素が消失し、その構造はLAによってラベルが決定されなくなったため独立分詞構文は衰退したと主張する。さらに13世紀末以降に独立分詞構文はLAによってラベルが決定されるCP構造へと変化し、主語に主格が付与されるようになったと主張する。

第3発表

英語のフェイク目的語結果構文の派生とその意味解釈について

常葉大学短期大学部講師 新妻明子

本発表では、英語のフェイク目的語結果構文の派生と意味解釈のプロセスについて、フェイク目的語の拡張について考察し、解釈の曖昧性を持つ構文が派生する動機づけと意味解釈のプロセスを分析する。英語の結果構文には、目的語の位置に生じる名詞句が動詞に下位範疇化されていないタイプの結果構文があり、そのような結果構文をフェイク目的語結果構文と呼ぶ。

フェイク目的語のタイプは3種類に分類可能であり、再帰代名詞タイプからの拡張であると考察する。さらに、“He painted the wall red.” のような結果構文は、実際に「壁が赤くなった」という結果状態が起こったと解釈されるが、“The joggers ran their Nikes threadbare.” の意味解釈には曖昧性が生じる。その解釈のプロセスを、アドホック概念という観点から分析することを試みる。

大会関係役員一覧

支部長	内 田 恵 (静岡大学)
副支部長	吉 田 江依子 (名古屋工業大学)
支部選出評議員	滝 川 睦 (名古屋大学)
支部代表理事	山 本 卓 (金沢大学)
事務局長	丸 山 修 (静岡大学)
事務局長補佐	横 越 梓 (名古屋工業大学)
書記	小 町 将 之 (静岡大学)
監事	鈴 木 達 也 (南山大学)

大会準備委員 (◎委員長 ○副委員長)

英文学

- 宮 地 信 弘 (三重大学)
- 川 津 雅 江 (名古屋経済大学)
- 内 藤 亮 一 (富山大学)
- 深 谷 公 宣 (富山大学)

米文学

- ◎杉 野 健太郎 (信州大学)
- 武 田 貴 子 (名古屋短期大学)
- 柳 沢 秀 郎 (名城大学)

英語学

- 柳 朋 宏 (中部大学)
- 二 村 慎 一 (愛知淑徳大学)
- 中 村 太 一 (福井大学)

開催校大会準備委員

- 中 村 太 一
- 木 原 泰 紀
- 本 田 安都子

